

山脇学園中学校

2024年度 入学試験問題

国語1科入試

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は□～□までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. 字数指定のある問いは、句読点・記号も一字として数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんは食事のときにあいさつはするだろうか。ファミレスに入っ
て見ても、ひとりで食事を取る人で声に出して「いただきます」とか
「ごちそうさま」と言っている人はまずいない。家族づれで小さな子供の
いる場合は、両親と子供たちであいさつしているのを見かけることもあ
る。たぶん家でも同じだろう。食事のあいさつは、家族団らんの象徴か
もしれない。こういった食事のあいさつだけれど、学生に聞いてみると家
庭と学校で教えられたそう。ぼくも子供のころ家庭で教えられ、幼稚園
や小学校でみんな一斉に「いただきます」や「ごちそうさま」と言ってい
た記憶がある。

ところで、食事のあいさつの意味はどういうものだろうか。これは基本
的に感謝の表現だ。「いただきます」は料理を作ってくれた人への感謝、
それから料理の材料を作ってくれた人への感謝である。ぼくも小さいこ
ろご飯を残したところ、^①お百姓さんが丹精込めて作ったものを粗末に
するな、と親に叱られたことがある。それからもうひとつ、食材となつて
いる植物や動物に対する感謝も、そこでは表現されている。そのトウト
い命をいただいているからである。そして、「ごちそうさま」は、かつて
は料理を作りもてなす人が食材をそろえるのに手間がかかりあちこち走
り回ったことから、その労に感謝して「ご馳走さま」と食後に言うようにな
ったそうである。「いただきます」にしても、「ごちそうさま」にしても、
すべて贈与に対する感謝の気持ちを表している。料理を与えてくれた者
への感謝、料理の材料を与えてくれた者への感謝、食材となり命を与えて
くれた植物や動物たちへの感謝、料理を与えるために^{注1}奔走してくれた
者への感謝が、そこには見られる。このように、単に人への感謝だけでは
なく、食材のため犠牲となつている自然の生き物への感謝もふくまれて

いるのだ。

食前のあいさつは欧米にも見られる。キリスト教徒は食べる前に神に
感謝の祈りを捧げる。自分たちが生きて食事ができることへの感謝であ
る。そして、お祈りが終わったあと、「イート」とか「レッツ・イート」
とか言つて食べ始めるのだ。ただ、この祈りはあくまで神への感謝であ
り、料理を作ってくれた人や食材を作ってくれた人への感謝とは違う。ま
してや、犠牲になつた食材への感謝もそこには認められない。人間と動植
物のあいだの^bキョウカイをはっきりさせるキリスト教には、食材とな
つて命を奪われる生き物たちへの感謝は基本的には存在しない。すべて
神への感謝なのだ。この点で、^②日本のあいさつとは根本的に異なってい
る。(中略)

動植物の命を奪うことにいかにぼくら日本人が敏感であつたかを示す
例を、ふたつあげておこう。

まずは草木塔。草木塔とは何だろうか。

俳句好きな人なら、放浪の俳人、種田山頭火の句集が『草木塔』という
タイトルであることを思い浮かべるかもしれない。「分け入っても 分け
入っても 青い山」のような素晴らしい句をいくつも残したこの俳人は
放浪の旅を続けながら自然の草木を愛していた。彼の俳句は草木を^{注2}供
養するものだったのである。

草木塔とは、伐採された草や木を供養するために建てられた記念碑の
ことである。江戸時代中期に、米沢で大規模な火事があり、町を再建す
るために大量の木材が必要となつた。

A 多くの木が伐採された。そのとき建てられた供養塔が、草木塔のはじまりとされている。この供養塔
が流布して全国に広がっていったのである。日本の家屋は長いあいだ木
造だったから、どうしても材木を必要とした。樵と呼ばれる人たちは、

山で木を切ることを生業にしていたが、自分たちが生活していくために、木々の生命を奪うことに罪悪感を覚えていた。彼らにとっては、木々にも魂が宿っているのだ。その罪の償いのために草木塔を建てて、自分たちがその命をいただいた木々を供養し感謝したのである。

仏教の教えに、「草木国土悉皆成仏」というものがある。これは、草木や国土のような心のない存在にも仏性が宿っているという意味である。この考えは③日本独特の仏教のあり方を表している。そもそもインド仏教の本来の思想は、「心のある存在」と「心のない存在」をはっきり分ける。前者は人間や動物であり感情をもっている。頭をぶたれたら痛いと感じる。後者は植物や石ころなど心をもっていないものである。ぶたれても痛いとは感じない（とされている）。だから、仏性が宿るのは「心のある存在」だけなのである。僧侶が菜食主義であったのは、この理由からである。ところが、日本の仏教では、仏性の宿る存在の範囲が拡大されていき、あらゆるものがその対象となってしまった。その結果、草や木にも山や川にも魂があることになる。仏になれるのである。

そうであるから、自分たちの生活のためとはいえ、草木の大切な命を奪うということは、罪深いことなのだ。命を与えてくれたことに感謝しなければならぬし、その魂を弔わなければならない。「自然の恵み」への感謝には罪悪感がともなわれている。

動物のほうはどうだろう。注4愛玩動物の供養の話はよく聞く。ペットとして飼い始めた動物が、自分にとってかけがえのないコンパニオン・アニマル（伴侶動物）になることもよくある。家族の一員としての動物や人生の伴侶としての動物が死んだら、人間に対するのと同じくらい悲しいし、葬式をしたりお墓を作ったりする。しかし、こういった愛玩動物でなくとも、動物の供養はおこなわれている。注6屠畜場では、食肉のため

に犠牲になった牛や豚を供養しているし、動物実験をする大学や研究所では、その命を奪った動物のために慰霊祭がおこなわれている。なぜこういう儀式をするかと言えば、命を与えてくれた動物たちへの感謝の気持ちからという理由とともに、殺された動物たちの祟りを恐れるという理由もあげられるだろう。ただそれも、日本人の心性のなかで④人間と動物の魂の連続性が前提になっているからだと言える。

こういったかたちでの供養は日本独特のものだ。B欧米には動物

愛護の精神があり、一九世紀のイギリス以来、動物保護の法律も作られている。動物福祉に関する法律では、日本よりイギリスやドイツのほうが進んでいるとも言われている。また、NPO法人も活動家もたくさん存在している。動物の肉を食べないベジタリアンやヴィーガンの伝統もある。「動物の解放」や「動物の権利」を主張する哲学者たちもいる。しかし、彼らが動物を保護するのは、動物には感情と知性があり、それが人間に近いからである。その結果、動物には人間同様に「生きる権利」があるのだ。しかしその反面、知性と感情において人間から遠い存在であるXは、食材として用いられてかわまないのだ。これは、あらゆる存在には仏性が宿るという日本化した仏教の考えとは、根本的に異なる。

日本の伝統的な動物供養で有名なものに、鯨供養がある。捕鯨は縄文時代から日本でおこなわれていたが、飛躍的に発展したのは江戸時代である。「網取り」という捕鯨技術の結果、鯨はそれまでよりはるかに多く捕獲できるようになったのだ。いくつかの藩には、鯨組という専門集団があった。紀州、長州、平戸藩などが名高い。鯨は神からの贈り物とされ、食肉や油をはじめ肥料や香料などさまざまな用途に余すことなく使われた。「鯨一頭七浦賑わう」と言われたように、鯨は漁師たちに多大な経済的な恩恵をもたらしたのだ。鯨組は藩のおかかえであり、

捕鯨は藩の重要な財源となった。しかし漁師たちは、自分たちの生業のために、鯨の命をいただいたことには罪悪を感じるし、生活の糧になつてくれたことには感謝もしていた。彼らは鯨墓や鯨塚を作つて遺骸を埋葬したり、供養塔を建てたりした。鯨の位牌や過去帳を作り保存している寺もあつた。

詩人の金子みすゞが生まれた山口県長門市の先崎一帯も捕鯨の拠点だった。彼女は⑤「鯨法会」という詩を読んでいる。

鯨法会は春のくれ、
海に飛魚採れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が、
ゆれて水面をわたるとき、

村の漁夫が羽織着て、
浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしと泣いてます。

海のおもてを、鐘の音は、
海のどこまで、ひびくやら。

多くの人が鯨の子の悲しさに共感するだろう。毎年春の暮れに鯨の注8法要がおこなわれるのは、犠牲になつた鯨への感謝からであり、その命をいただいたことへの償いからなのだ。

(二部内容を省略し、表記を改めました)

【岩野卓司『贈与をめぐる冒険』】

- 注1 奔走…物事がうまく運ぶように、かけまわって努力すること。
- 注2 供養…亡くなった人などの死後の幸福を願つて、お祈りやお供えものなどをする事。
- 注3 仏性…仏となることのできる性質のこと。
- 注4 愛玩動物…人間とともに暮らすペットのこと。
- 注5 コンパニオン・アニマル
- …人間と生活を共にするような、親密な関係の動物のこと。
- 注6 屠畜場…家畜を殺して食肉に加工する施設のこと。
- 注7 位牌や過去帳…亡くなった人の名前や生没年月日などを記した木札や帳面のこと。
- 注8 法要…死者をとむらうために行う仏教の儀式。法会も同じ。

問一 ――― 線 a・c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A・B に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選
びなさい。(同じ記号を二度使用しないこと)

ア もちろん イ そのうえ ウ けれども

エ そのため オ あるいは

問三 ――― 線①「お百姓さんが丹精込めて作ったものを粗末にするな」
という言葉に込められた思いを説明した次の文の に当てはま
る言葉を、本文中のこれより後ろの部分から十字でぬき出しなさい。

* 食事をする時には に対する感謝の気持ちを持つことを忘れ
てはならない。

問四 ――― 線②「日本のあいさつとは根本的に異なっている」とありま
すが、日本と欧米の「食事のあいさつ」についての説明として最も適
当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 食事ができることを感謝する気持ちは同じだが、感謝の気持ちの
強さが異なる。

イ 食事に対する感謝の思いを言葉にして表す点は同じだが、感謝の
対象が異なる。

ウ 食材となった生き物への感謝の思いを持つ点は同じだが、その表
現方法が異なる。

エ 食事の時にあいさつをする点は同じだが、あいさつのタイミング
や回数が異なる。

問五 ――― 線③「日本独特の仏教のあり方」とありますが、インド仏教

と日本の仏教の考え方の違いについて、次の(1)・(2)の条件を全て満た
すように説明しなさい。

(1) 書き出しは「インド仏教が」で始めること。

(2) 八十字以内の一文で書くこと。

(下書き用)

問六 ——— 線④「人間と動物の魂の連続性が前提になっている」とはどのようなことを説明した次の文の に当てはまる言葉を、二十五字以内で答えなさい。

* ということが人々の共通の考えになっているということ。

問七 X に当てはまる言葉を、本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問八 ——— 線⑤『鯨法会』という詩」について、筆者はどのような意図でこの詩を引用したと考えられますか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

- ア 子鯨の悲しみを通して、食肉という残酷な行いを非難するため。
- イ 鯨の肉が神から人間への贈り物であることを印象づけるため。
- ウ 生き物の命を奪うことへの日本独特の罪の意識を伝えるため。
- エ 人間は自然の恵み無しには生きてはいけないことを示すため。

問九 本文の内容として当てはまるものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 食事の時のあいさつの仕方は国や文化によって異なるが、そこに込められた思いはどの国でも共通している。

イ 種田山頭火は、自分の愛する自然の草木が樵たちによって伐採されてしまうことの悲しみを俳句で表現した。

ウ インド仏教の僧侶と欧米のベジタリアンやヴィーガンが動物の肉を食べない理由には共通する部分がある。

エ 動物にも人間と同様に「生きる権利」があるという考え方は欧米独特のものとして考えられ主張されてきた。

オ 草木塔や鯨法会で表現されている精神は共通しており、それは日本独特の仏教の考え方とも通じている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私（ヒロ）」は、ハワイで生まれ、日本の児童養護施設「よつばの家」で育った。同じく施設にいたことのある一つ年上の晴太と出会い、晴太と十歳ほど離れた弟の蒼とともに同じ家で暮らすこととなった。高校を卒業した後、専門学校などで料理を学んだ「私」は、晴太とともに惣菜店を営んでいる。ある日、中学三年生になった蒼が突然一週間ほど家を空けた。本文は、帰ってきた蒼からハワイに行ってきたと打ち明けられた場面である。

「——なんで私の母を見に行こうと思ったの」

そんな事を考えているなんて微塵も想像していなかった。思えば蒼が専門学校へ行きたいなどと言いつ出したときから、私は途端にこの子のこととがわからなくなったのだった。なんでも知っているようなつもりだったのに。

ふと、この子もそうだったのでは、と気付いて蒼を見つめた。なんでも知っているようなつもりだったのは、蒼ものではないか。蒼はまるで私の疑問に答えるみたいに、

「おれ、なんにも知らなかった。ヒロがなんで日本に来たのか、どうやって大人になったのか、わかってたつもりで、考えたことなかった」

私が晴太や蒼と暮らし始めたのは、親がおらず施設がいやで、^{注1}黒宮慎司に家に置いてもらっていたのだと蒼には言っていた。ハワイ生まれであることを蒼も知っていたが、今まで出自について訊かれたことは一度もなかった。

おおざっぱで、常に外を向いていて、友達の多い蒼が今の生活や私たちのことを正面から尋ねてこないのいいことに、私は説明を怠った。友

達が多いからこそ、周りと比べて我が家を不思議がってもおかしくないのに。もしかするともっと早く、幼い頃からふつふつと小さな疑問を胸に溜めていったのかもしれない。

「ヒロのことが知れたかった。訊いたら教えてくれるのかもしれないけど、そういうんじゃない、自分でどういふもんか確かめてみたかった。

おれが死んだ母親のこととか金送ってくる父親のこととかをときどき考えるみたいに、ヒロは考えねーのかなと思ったんだよ。考えねーならなんでもだろって思ったんだよ」

ア ぼたたつと、思い出したみたいに台所の蛇口から水滴が落ちた。

「私は」

① ツーと鳴り続ける電子音が、頭の中を一杯に満ちた。なんの音だろうと気になるものの、考えはまとまらず、代わりにまた「私は」と言葉が溢れる。

「あそこに六歳までいたの。あんたが会ってきた人たちに育てられて」

うん、と蒼が頷く。

うかされたように私は話す。

「私の父親は日本人で、だから日本に連れてこられたけど、私にも、どうしてそうなったのかちつともわからないの。誰も教えてくれなかったし、私も知ろうとしなかったし。日本に来たとき、本当に、周りの言葉がわからなくて、いろんな生き物がいろんな声で鳴いてるみたいにしか聞こえなくて、でも、晴太が」

晴太だけは聞こえた。私の言葉も、晴太にだけは届いた。そしていつの間にか蒼にも。

「晴太が蒼に会わせてくれたの。あんたがまだ赤ん坊のとき、初めて会った」

言葉が詰まる。喉がひりつき、マグカップを握りしめる。まだ熱いカッ

プが手のひらを焼き、**A**と痛む。まだ、どこか遠くからツーとムキシツシな電子音が耳鳴りのように聞こえてくる。

「うらやましくて、私、あんたたちがものすごくうらやましくて。本当の父親はよつばの家にときどきお金を送ってくれていたけど、それもコソコソした感じで、私はすごく嫌で、だからそういうものが届かない場所に行きたかった。あんたたちの家はすごく広くて、誰もいなくて、ここなら私人居着いたってたいして変わらないんじゃないかと思って」

小学校を卒業するとき、中学、そして高校を卒業するときも、一瞬かすめた。私、ハワイに帰った方がいいのだろうか。でも、帰ったところできつとここ以上に居場所なんてないだろうという確信じみた予感もあつて、同時に、ふたりと暮らすこの場所を手放すなんて絶対にできないと感じた。

よつばの家が父に送った事務連絡の手紙は、「あて所に尋ねあたりません」のはんこが押されて戻ってきたという。そのことを聞いたとき、妙なすがすがしさが私を包んだ。

これでひとりだ。ついにひとりになった。私の胸にぐっと押し込まれた事実を私は喜んで迎え入れた。

不意に気付く。頭の中を満たすこの電子音は、電話が切れたあとの音。

私は父の行き先がわからなくなったとき、唯一知らされていた電話番号がきちんと繋がらなくなっていることを確かめた。これまで自分からは一度もかけたことのなかった番号を押すとき、吐き気がするほど緊張した。黙って居場所を移したのだ、もう繋がるわけがないとわかっていたのに、どこかで、もしかしたら父が電話に出るかもしれない、初めてその声を聞かかもしれないと、構えていた。

案の定機械音声が流れたとき、強張っていた肩から力が抜けた。繋がらないことを確かめたはずなのに、同時に何かがひどく損なわれ、もう戻っ

てこないようにも感じた。

そのとき耳に沁みた音が脳裏によみがえっているのだ。私にとってそれは、ある種はじまりの合図みたいなものだった。

「おれが言ったんだよ。三人で暮らそうって」

晴太が顔をしかめて言った。

「三人がよかったんだよ」

どこかランボウにそう言い切って、晴太は突然立ち上がった。椅子の脚が床を叩き、思いのほか大きく響いた。

「もういいだろ。お前、ヒロのことを知ってどうするんだよ。これ以上はおれだって知らないよ。知ってどうしたいんだよ。お前が思うヒロと違ったりしたら、なにか変わるのかよ」

「晴太」

急に声を荒らげた晴太に戸惑い、**B**とした声がこぼれてしまう。

「おれはヒロが誰だろうとどうでもいい。もちろんヒロだろうがヒロコだろうが、どっちでもいい。三人でここまで暮らしてきたんだ。家だってあるし、蒼が出てったところで帰ってくる場所はここだ。おれだってここ以外に行くところなんてない。家族はふたり以外にはいない。おれがどんなつもりで、あの人を」

ぼろぼろと水が落ちた。イ透明の玉が晴太の頬を転がった。

「あの人を、父さんなんて呼んでるか、おれ以外には絶対にわからない」

私は座ったまま、そのうつすら赤らんだ鼻先を見上げた。

知らないことをみずから知りに行った蒼。ぼやけた事実をあえてそのままにした晴太。

毎日笑っていたはずなのに。晴太は、その大きくなった身体の内側ですつと私と蒼と、そして自分自身を思っこんなふう泣いていたのだ。

「泣くなよ」

蒼が言った。

「ずるいだろ。おれより先に生まれて、三人で暮らすことも自分で決めたくせに。おれより先に生まれただけで、晴太もおれもあの家からほっぽりだされたのは同じじゃん。自分だけ辛いみたいな顔すんな」

蒼は^{注2}ねめつけるみたいに晴太を見上げていた。そんな蒼を正視できず、私は目をそらした。

でも、蒼の言うことは違う。^②晴太を責めるのはお門違いだ。だって晴太が今までただの一度も不幸な顔をしなかったから、蒼は自分で気がつくまで知らずにいられたのだ。黒宮家の「いらぬ部分」である自分たちを不幸だと嘆かず^{なげ}にいてくれた晴太のおかげで、私たちはゆつくりと小さな幸福を作ってこられた。三人の、三人だけのための小さな家の中で。

晴太は小さく涙^{なみだ}をすすり、律儀^{りぎぎ}にも「ごめん」と謝^{あやま}った。そのまま椅子^{いす}に沈み込み、また涙をすすり、言う。

「おれたち、誰一人として血が繋がってないけど」

そうだね、と私は頷く。

「でも家族だったじゃん」

晴太ははつきりと言った。そうだね、とまた私は頷く。

「おれはそれ以上も、それ以外にも、もうなんにもいらぬんだよ。余分な本当のことはなくていいんだよ。知りたくないんだ。知るのが怖い」

そのとき、ちかっと真上の照明が明滅した。ウ三人が同時に照明がバ―の内側で死んでいる虫の影ごとその光を見上げた。

晴太がこうやって怯えて^{おび}いることを、本当は私は知っていたような気がした。だから私はハワイから時折届くエアメールを晴太に見せなかったし、晴太も黒宮慎司のもとから届く金額を私には知らせなかった。^③私たちは巧妙^{こまごま}に知り過ぎることを避け、バランスを取っていた。

私には、晴太の気持ちがよくわかった。

知ることは怖い。知らない日本は怖かったが、与えられる日本語を覚えていくことはまるで手当たりしだいに言葉を食べていくようで、自分がクウフクの怪物^{かい}になったような気がしてさらに恐ろしかった。

中学で、^{注3}私のノートを穩便に取り返してくれた晴太が言葉にしない怒りを喉につまらせていることに気付いたが、どうしてそれを言葉にしないのか、私にも私のクラスメイトにもぶつけないのか、わかってしまいたいそうなのことが怖かった。私たちは怯えながらも、知らずにいることが私たちを守るのだと信じていた。

一方で、^④蒼の気持ちも理解できた。いや、できるような気がする。

蒼が家を出ると言った日から私を埋め尽くした「どうして」は、どこにも収まりきらずに溢れ出した。まだ自分で何もできない赤ん坊の蒼を知っているのに、まだ私は蒼のすべてを知らないでいる。この子をもっと知ることができていれば、蒼は出ていくなんて言わなかったのではないかと何度も考えた。私の中に蓄積^{ちく}されたはずの蒼をかき集めて、目を凝らして見つめればわかるはずだと。

でも、血眼^{まなこ}で探したところで、見つからなかった。わからない、の言葉だけがぼつんと残された。

「ヒロがもし、ハワイで大事にされてたのならどうしようかと思った」

蒼がぼつりと言う。突然、寂し^{さび}そうな表情を浮かべて。

「大事に？」

「帰りたくなる場所が、ここ以外にあるのはずるいじゃん」

きまり悪そうに早口でそう言って、蒼はうつむいた。そして続ける。「ヒロの生まれたところがそういう場所だったらって想像したら、急にヒロが知らない人みたいに思えたんだよ。ヒロのことが知りたくてハワイまで行ったのに、知れば知るほど、知らない人になる気がして」

わかるよ、と不意に口をつきそうになる。

「でもわかんなかった。あそこが、ヒロにとってどういう場所なのか。つていうか、おれはそういうことを知りたくて行ったのかもわかんなくなってきた」

そしたら途端に帰りたくなつたのだと蒼はふてくされたように言った。「おれが行っても仕方ないところだったんだ。あそこがどういう場所なのかは、多分ヒロにしかわかんねーのに」

私ならわかるのかな。

疑問をぶつけるように晴太を見ると、まだ目の縁を赤くした晴太は私を見つめ返した。丸くまっすぐな目。でも何も答えてくれない。

そうか。私のことは結局、私だけが受け入れて引き受けて背負っていくのだ。ハワイで、蒼は⑤それに気が付いたのだ。

私は蒼のゆりかごを掴んだあの日から、必死で蒼を私の一部にしようとしたけれど、土台無理な話だったのだ。

蒼はこれから自分で、自分を手に入れていくのだから。当然私の一部になるわけがない。もちろん晴太のそれにだってならない。

晴太は知っていたの、と聞きたくなる。私たちが一人ずつの私たちなことを知っていたの、と。

口をつぐんだままの晴太と私を交互に見て、蒼は自分の唇の皮を剥きながら「なんかさ」と言った。

「おれたちはおれたちだけでいすぎる気がする。変だとかそういうんじゃないけど、おれたちは三人以外を知らなすぎる気がするって、前から思ってた」

エ 蒼は晴太によく似た黒い目を私たちに据えて言う。まるで教諭する大人のように。

「おれはおれのことを知りたい。それからおれたち三人以外のことも知りたい。大人になったときに太刀打ちできるように。そのために、おれは

ここを出たい」

たちうち。何に、と聞きたくなるが、聞かずとも私はなんとなくわかっている。世間とか、社会とか、私たちを後ろから追い立てる強く大きなにこだ。それに対抗するためには、まず蒼が私たちから離れなくてはいい。蒼はそう言っているのだ。いつかまた三人で暮らせるように。

はつとして、私は気付く。思い出し、赤面する。蒼が家を出ると言ったあのとき、うろたえた私の姿に蒼はさらに確信したことだろう。この家を出なければと。三人でいること以外を受け付けない私の頬を叩き、目をこじ開けさせ、変化の先にあるものを見せるために。それが何か今はまだわからなくても、かならず存在することも蒼は知っていた。

「だから、学校は全寮制のところに行きたい。その間、店、手伝えなくて悪いけど」

「それは」

私と晴太の声が重なる。ふっと肩の力が抜け、笑みが洩れた。

「大丈夫」

「お前はたいした戦力じゃない」と晴太も続ける。

「むしろ皿も割れなくなるし」

「つまみ食い分の材料費が浮く」

「な、おれだって多少役に立ってただろ」

蒼が本気で憤慨したように目を剥く。私と晴太はついに吹き出して笑った。同時にこぼれた涙も止まらなくなった。でも、**C**と落ちる涙がテーブルに滲みていくごとに、私の中の^{注4} 澱は澄んで、体も軽くなっていく。

「料理の学校が良いかなって思ったのは、やっぱりヒロのせいだわ」

上目遣いに、噛み付く子犬のような目で蒼が私を見る。「私のせい」と聞き返すと、少し考え直す間を置いてから、蒼は首を傾げた。

「うちの環境のせいっつか。いっつも食べ物におの匂いがしてるのっいいじゃん。でも、うちでめし作れるのってヒロしかないし、おれも作れるようになればなんかいい感じだろ」

「ヒロのおかげって言えばいいだろ、最初から」

なに照れてんだよと晴太がつつくと、はあ照れてねえしと蒼がそっぽを向く。

⑥そのやりとりを、小さな箱に入れてしまいたいと思った。箱にしまつて、そつととつておきたい。からからと振ふったらしい音が聞こえるはずだ。

【菰野江名『つぎはぐ、さんかく』】

注1 黒宮慎司：蒼の父親。蒼が生まれる前に、晴太を養子として引き取

っていた。蒼とは別に、自分の後継つぎにと考えている子供がいる。

注2 ねめつける：にらみつけること。

注3 私のノート：提出した課題のノートをクラスメイトが答えを写すために利用していたのを晴太が見つけ、取り返した。

注4 澱：液体の中に沈んだかす。

問一 線 a ～ c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A C に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次

の A ～ オ から選びなさい。(同じ記号を使用しないこと)

- ア おろおろ イ しんしん ウ ちりちり
エ はらはら オ よろよろ

問三 線①「ツ」と鳴り続ける電子音が、頭の中を一杯に満たす」

とありますが、この「電子音」を実際に聞いたときの「私」の気持ちを八十字以内で説明しなさい。

(下書き用)

問四 ——— 線②「晴太を責めるのはお門違いだ」とありますが、「私」がそのように思うのはなぜですか。本文中の言葉を用いて、六十字以内で答えなさい。

問五 ——— 線③「私たちは巧妙に、バランスを取っていた」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 自分の本当の家族に関することを相手に伝えないことで、血の繋がった家族と暮らしたいという願いを隠そうとしていた。

イ 相手の自分に対するイメージを崩さないようにすることで、世間で理想的とされている家族の姿に近づけようとしていた。

ウ お互いにこの家以外に居場所があると相手に思わせるようなことはせず、自分たちだけの家族としての関係を作っていた。

エ 本当のことは話さず相手が望むことだけを伝えることでお互いに信頼関係を築いて、一般的な家族に見えるようにしていた。

問六 ——— 線④「蒼の気持ち」について、それを説明した次の文の 1
3 に当てはまる言葉を、それぞれ本文中から指定の字数でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

* ヒロについて 1 (二十五字以内) 理解しているつもりだ

つたが、もしかしてヒロには 2 (二十字以内) のかもしれない

いと考えて行動した結果、 3 (二十字以内) ように感じるようになった。

問七 ——— 線⑤「それ」の内容を表している部分を、本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問八 ——— 線⑥「そのやりとりを、小さな箱に入れてしまいたいと思っ
た」とありますが、このときの「私」についての説明として当てはま
らないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 蒼がこの先家を出ていってしまった後も、二人のこの何気ないや
りとりをずっと覚えていたと思った。

イ 自分がきっかけで料理の世界を目指す蒼に言われて恥ずかしく
なり、誰にも見せたくないと思った。

ウ 晴太と蒼のやりとりを見て、血は繋がっていないでもお互いを思
い合う家族の姿を大切にできなかった。

エ 今まで抱えていた不安がなくなり、晴太と蒼のやり取りが心地よ
くいつまでも聞いていたくなった。

問九 ——— 線ア～エについての説明として最も適当なものを、次のア
～エから選びなさい。

ア 「ぼたたつと、思い出したみたいに台所の蛇口から水滴が落ちた」
は、「私」が辛かったことを思い出し、泣き出したい気持ちでいるこ
とを暗示している。

イ 「透明の玉が晴太の頬を転がった」には擬人法が用いられており、
晴太が自分でも気づかないうちに涙を流してしまっていることを表
している。

ウ 「三人が同時に照明カバーの内側で死んでいる虫の影とその光
を見上げた」で、兄弟のやり取りが一度途切れ、「私」の思考へと話
が移っている。

エ 「蒼は晴太によく似た黒い目を私たちに据えて言う」では、蒼と晴
太が血の繋がりがなくてもお互いそれを気にしていないことが強調
されている。